中国新聞　　2007/7/28(土)

ひろしま歴史回廊

第10部・厳島の文化⑥

長沢蘆雪「山姥図」　愛と生への執着象徴

土曜日に掲載します

一七九七（寛政九）年、長沢蘆雪（一七五四―九九年）の描いた絵馬「山姥図」（重要文化財）が厳島神社に奉納され、祓殿の外正面に掛けられた。富士屋喜兵衛ら九人の有力商人による寄進で、当時は祈願や報謝のために絵馬奉納が盛んに行われていた。

■母性を巧みに表現

山姥図は古くからある山姥と快童丸（金太郎）の伝説を題材としている。蘆雪晩年のグロテスクへの傾倒を示す傑作というのが今日の定評だが、こちらをにらみつける山姥の目には、わが子を守ろうとする気迫だけでなく、哀しみと慈愛が感じられる。己はどんなに老いさらばえようとも、子どもには与え得るものをすべて与えてきた母の愛情である。それは、丸々と太った快童丸が甘える姿からもうかがわれる。

同時代の浮世絵師、喜多川歌麿（一七五三―一八〇六年）は、一連の「山姥と金太郎」で若く美しい、妖艶さえ漂わせる山姥を描いた。わが子をいとおしそうに見つめる母。二人の絵師の作品は一見対照的だが、ともに山姥の母性を巧みに表現している。

■「つきそう守り神」

蘆雪の山姥図は、近松門左衛門の浄瑠璃「嫗山姥」に最も近い。山姥は八重桐という遊女であった。夫となった坂田時行が、親の敵討ちを果たせず無念のうちに自害する。彼は己の魂を八重桐に宿らせ、転生することを誓う。快童丸が生まれ、やがて源頼光に見い出される。山姥は芝刈り女の姿をしているが、頼光に刀を向けられたとき、思わず角が生え眼光輝く姿を現す。快童丸が頼光の家来になるならば、夫は本懐を遂げ、自分は成仏できると涙ながらに訴える。召し抱えられた快童丸に、「影が身にそうように、常につきそっている守り神」であると告げて姿を消す。

近松の作品に親しんでいた江戸時代の人々は、蘆雪の絵をいっそう興味深く見ることができただろう。この絵は、母の慈愛とともに、人間の生への執着も象徴しているのだ。前回触れた蓬莱山図も生への執着を表す。そこには二人の幼子を失った蘆雪自身の深い悲しみも重なる。

（県立広島大教授・天野みゆき）

厳島神社が所蔵する長沢蘆雪の「山姥図」（絹本着色、縦157センチ、横84センチ）